The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西暦9・10世紀のアラビア語地理文献について : 人文地理を中心に (2)
Author(s)	竹田, 新
Citation	大阪外国語大学論集. 2003, 28, p. 173-192
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79908
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学論集第28号（2003年）

西暦9・10世紀のアラビア語地理文献について
−人文地理を中心に−（2）

竹　田　　新

On Arabic Geographical Works in the 9th and 10th Centuries (2)

TAKEDA Shin

（1）

西暦10世紀に入ると，“人文”地理学[1]の分野においては，一方ではIbn al-Faqîh（290AH/903年以後没）の*K. al-Buldân*『国々』，al-Mas'ûdî（345/956年没）の*K. Murûj adh-dhahab wa-ma'âdin al-jawhar*『黄金の牧場と宝石の鉱山』や*K. at-Tanbîh wa-'l-ishrâf*『提言と再考』，Abû Zayd as-Sîrâfî（304/916年以後没）の*Akhbâr as-Sîn wa-'l-Hind*『中国・インド情報』補遺，Ibn Fadlân（310/922年以後没）のal-Bulghâr（ヴォルガ＝ブルガール）旅行記，Abû Dulaf（342/953年以後没）のウィグル（或いはトルキスタンとインド）旅行記，Buzurg b. Shahriyâr（343/954年以後没）の*K. 'Ajâ' ib al-Hind*『インドの諸奇事』，Ibn Sulaym al-Uswânî（365/975年以後没）の*K. Akhbâr an-Nûba wa-'l-Maqurra wa-'Alwa wa-'l-Buja wa-'n-Nîl*『ヌビアとマクッラとアルワとベジャとナイルとの情報』といった「国々の奇事の学」に属する作品が世界各地の多彩な記述を提供する。その他，作者未詳の'ajâ' ib（奇事）書（通称，*K. Mukhtasar al-'ajâ' ib*『諸奇事の要約』）もこの世紀の作品かも知れない。

そして，もう一方ではal-Balkhî（322/934年没）の*K. Suwar al-aqâlîm*『諸州の姿』，Qudâma（337/948年没）の*K. al-Kharâj wa-sinâ'at*（或いは*san'at*）*al-kitâba*『租税と書記術』，al-Istakhrî（350/961年頃没）の*K. al-Masâlik wa-'l-mamâlik*『諸道と諸国』，Ibn Hawqal（380/990年頃没）の*K. Sûrat al-ard*『大地の姿』，al-Muhallabî（380/990年没）の*K. al-Masâlik wa-'l-mamâlik*，al-Muqaddasî（380/990年以後没）の*K. Ahsan at-taqâsîm fî ma'rifat al-aqâlîm*『諸州の知識に関する最良の区分』といったイスラーム圏の地誌記述を中心とした「諸道と諸国の学」に属する書が著され，この地誌的地理学は黄金期を迎える。

また，「諸道と諸国の学」だけでなく「国々の奇事の学」にも属する書としてIbn Rustih（310/922年以後没）の*K. al-A'lâq an-nafîsa*『貴重品』，al-Jayhânî（313/925年以後没）の*K. al-Masâlik wa-'l-mamâlik*，Mutahhar al-Maqdisî（355/966年以後没）の*K. al-Bad' wa-'t-ta'rîkh*『創始と歴史』などがある。その他，al-Hamdânî（334/945年没）の*K. Sifat jazîrat al-'Arab*『アラビア半島の特質』，Ahmad ar-Râzî（344/955年没）のal-Andalus（イベリア半島）誌（歴史書の一部か），'Umar al-Kindî（357/968年以後没）の*K. Fadâ'il Misr*『エジプトの長

所』といった一地方誌や，Ishâq b. al-Husayn（341/952年以後没）の *K. Âkâm al-marjân fî dhikr al-madâ'in al-mashhûra fî*（或いは *bi-*）*kull makân*『各地の有名な町々の叙述に関する珊瑚の丘』という世界地名辞典も現れる。更には「国々の奇事の学」と後述する「経度と緯度の学」の両要素を含む Ibn al-Qâss（335/946年没）の *K. Dalâ'il al-qibla*『キブラ（礼拝の方向）案内』も登場する。

（2）

Ibn al-Faqîh の名で知られる Abû Bakr Ahmad b. Muhammad b. Ishâq b. Ibrâhîm は，al-Jibâl（メディア）の Hamadhân 出身（彼は al-Hamadhânî と呼ばれる）のイラン系 adîb（文人）で，ハディース（聖伝承）にも精通していたようである。彼は290/903年頃，5巻に及ぶ地理書『国々』を著したらしい[2]が，現在知られているものは，Abû'l-Hasan 'Alî b. Ja'far ash-Shayzarî の手になる要約（413/1022年）と，後半部分に当たる，一般に Mashhad（Meshed）写本と言われる[3]筆者不明の要約（7 /13世紀）である。

まず，ash-Shayzarî の要約では，大地の創造，海洋とその大地環囲，海洋とその奇事，{as-Sîn（中国）の地と al-Hind（インド）の地との相違}；Makka（メッカ），at-Tâ'if，al-Madîna（メディナ），{Tihâma（アラビア半島西部海岸地域）と al-Hijâz（半島西部）との相違}，al-Yamâma（半島中部），al-Bahrayn（半島東部），al-Yaman（イエメン）；真面目から巫山戯へ巫山戯から真面目への変化；故郷からの遠離への賛美；Misr（エジプト）と an-Nîl（ナイル）；al-Maghrib（北西アフリカだが，ここでは al-Andalus も含む）；ash-Shâm（シリア），Bayt al-Maqdis（エルサレム），Dimashq（ダマスクス）等；al-Jazîra（上メソポタミア）；ar-Rûm（東ローマ）；{建造物の賛美と非難}；al-'Irâq，al-Kûfa，{al-Khawarnaq}，al-Basra；Fâris，Kirmân，al-Jabal（= al-Jibâl），Qirmâsîn（ケルマンシャー），Hamadhân，{神が各地に特有とした品物}，Nihâwand，Isbahân，Qumm，ar-Rayy（レイ）と Dunbâwand（ダマーヴァンド），Qazwîn と Zanjân と Abhar，Âdharbayjân（アゼルバイジャン），Armîniya（アルメニア），Tabaristân，Khurâsân；という内容になっている[4]。

次に，Mashhad 写本に拠る後半部分は，al-Kûfa，al-Basra，Wâsit，{an-Nabat（下メソポタミアのナバト人）}，平安の都 Baghdâd，Surra man ra'â（サーマッラー），as-Sawâd（下メソポタミア）とその特質ほか，al-Ahwâz（フーゼスターン），Fâris，Kirmân，al-Jabal（= al-Jibâl），Qirmîsîn，国々の建造物とその特色や奇事，Hamadhân，{神が各地に特有とした品物}，Nihâwand と Isbahân と Qumm，ar-Rayy と ad-Damâwand，Qazwîn と Abhar と Zanjân，Tabaristân，Khurâsân，at-Turk という項目の記述を含んでいる[5]。

この書は前世紀の al-Jâhiz の *K. al-Buldân*『国々』（248/862年）と同様，或いは al-Jâhiz の書を模倣したと言った方がよいかも知れぬが[6]，各地の khasâ'is（特異な事柄）・'ajâ'ib（不思議な事柄・奇事）を中心に展開する地理書であり，読者を楽しませることに意を注いでいる。それゆえ，詩や寸話が随所に散りばめられており，adab（教養人文学）としての記事が上記（真面目と巫山戯，故郷からの遠離，建造物の評価）のほかにも幾つか（ash-Shâm 住民と al-Basra 住民による葡萄と棗椰子の優劣をめぐる論争，al-Kûfa 住民と al-Basra 住民の自慢争い，著作者の義務と良書の長所，郷土愛など）挿入されている。後述する al-

Muqaddasî はこうした adab 的要素の導入を地理書としては不適切な逸脱だと批判する[7]が，地理書を adab の中に取り込んだことは評価すべきである。その他，目に付く特徴として al-Jâ**hiz** の『国々』と同様，宗教上の中心アラビアが政治・文化上の中心 al-'Irâq より重視されている（ただし，記述は al-'Irâq の方がアラビア半島より詳しい）ことが挙げられる。Ibn al-Faqîh の『国々』はその後，al-Mas'ûdî・al-Muqaddasî の各前掲書，{al-Bakrî（487/1094 年没）の *K. al-Masâlik wa-'l-mamâlik*『諸道と諸国』}，Yâqût（626/1229 年没）の *K. Mu'jam al-buldân*『国々の辞典』，Sibt b. al-Jawzî（654/1256 年没）の *K. Mir'ât az-zamân fî ta'rîkh al-a'yân*『名士たちの歴史に関する時代の鏡』，Ibn al-'Adîm（660/1262 年没）の *K. Bughyat a**t-t**alab fî ta'rîkh **H**alab*『アレッポ史研究の望ましいもの』，al-Qazwînî（682/1283 年没）の *K. Âthâr al-bilâd wa-akhbâr al-'ibâd*『諸国の古跡と信者の情報』（以下，『諸国の古跡』と略記）と *K. 'Ajâ'ib al-makhlûqât wa-gharâ'ib al-mawjûdât*『被造物の諸奇事と存在物の諸珍事』，Abû 'l-Fidâ'（732/1331 年没）の *K. Taqwîm al-buldân*『国々の調査表』，Ibn ad-Dawâdârî（741/1340 年没）の *K. Kanz ad-durar wa-jâmi' al-ghurar*『真珠の宝庫と精粋の集成』などに利用・引用される。

al-Mas'ûdî すなわち預言者ムハンマドの教友 'Abd Allâh b. Mas'ûd の子孫たる Abû'l-**H**asan 'Alî b. al-**H**usayn b. 'Alî b. 'Abd Allâh は Baghdâd に生まれ，若い頃（303/915 年以前）から旅に出て，Khurâsân から Misr までの言わばイスラーム圏の中心部をはじめ，as-Sind（インダス川流域），al-Lâr（西デカン海岸），az-Zanj（東アフリカ海岸と周辺地域）の Qanbalû（Pemba 島？）といった辺境・異境をも訪れ（インド洋とカスピ海は船行），晩年は al-Fustât（古カイロ）に住んだ百科全書家的 adîb で，シーア派的信仰を持っていたと言われている[8]。彼は地歴書だけでも 7 種を著したようである[9]が，現在に伝わるのは 336/947 年脱稿の『黄金の牧場と宝石の鉱山』と，345/956 年脱稿の『提言と再考』と言ってよい。

『黄金の牧場と宝石の鉱山』は，30 篇に及ぶと言われる[10]主著 *K. Akhbâr az-zamân wa-man abâda-hu 'l-**h**idthân min al-umam al-mâ**d**iya wa-'l-ajyâl al-khâliya wa-'l-mamâlik ad-dâthira*『時代と，時の中に消え去った過去の民やいにしえの世代や消えた国々との情報』（通称 *K. Akhbâr az-zamân*『時代の情報』）の要約と考えられ，宇宙創造時からアッバース朝第 23 代カリフ al-Mutî' の治世（334 ～ 63/946 ～ 74 年）までを対象とした 132 章からなる。そのうち第 7 章が al-Hind の諸事情，第 8 章が大地と海洋と天体など，第 9 章が河川，第 10 章が **H**abasha 海（インド洋），第 11 章が潮汐，第 12 章が Rûm 海（地中海），第 13 章が Buntus の海・Maytus の海・al-Qustantînîya の湾（黒海とマルマラ海），第 14 章が al-Bâb wa-'l-abwâb・al-Khazar・Jurjân の海（カスピ海）と諸海の順序など，第 15 章が as-**S**în の諸事情など，第 16 章が諸海（実際はインド洋東部）や al-Andalus など，第 17 章が al-Qabkh（カフカス）の山と al-Khazar や ar-Rûs など，第 31 章が Misr と an-Nîl などの諸事情，第 32 章が al-Iskandarîya（アレクサンドリア）の諸事情，第 33 章が as-Sûdân（サハラ以南）と az-Zanj ほか，34 章が as-**S**aqâliba（スラブ），35 章が al-Ifranja（フランク）と al-Jalâliqa（ガリシア），36 章が an-Nawkubard（ロムバルド），第 40 章が諸国の特質，第 62 章が東西南北ほかや諸国の距離，第 63 ～第 68 章は諸民族の聖館を扱い，部分的には，第 29 章〈al-Qustantînîya

（コンスタンティノープル）諸王〉中のal-Qustantînîyaをはじめ，多くの章に地理的記述が見られる[11]。

この作品では地理が言わば歴史の序文のように扱われており，彼の地理と歴史とを分けない，或いは地理を歴史の一部と考える姿勢が窺われる。以後の歴史書にしばしば見られる，序論の一部として地理に言及する，或いは本論自体に地理を挿入するスタイルの先駆的作品である。そして，アッバース朝帝国内の道路・地方誌には殆ど触れず，al-Hindやas-Sînほか（イスラーム前のアラブも含む）の人々と宗教をはじめとする，異境の珍しい情報に重きを置いており，後述する「諸道と諸国の学」の代表Balkhî学派の作品とは際立った対照を見せる，「国々の奇事の学」の典型的な作品と言えよう[12]。以後，『黄金の牧場と宝石の鉱山』の地理部分は異境のほかMisrなどの記述も含めて，al-Bakrîの前掲書，az-Zuhrî（549/1154年没）の*K. al-Jughrâfîya*『地理』，al-Idrîsî（560/1165年没）の*K. Nuzhat al-mushtâq fî ikhtirâq al-âfâq*『諸国踏破を熱望する者の楽しみ』，著者不詳の*K. al-Istibsâr fî 'ajâ'ib al-amsâr*『諸都市の奇事の熟考』（587/1191年著），Yâqût・Sibt b. al-Jawzî・Ibn al-'Adîmの各前掲書，al-Qazwînîの『諸国の古跡』，Ibn Sa'îd（673/1274年没）の*K. al-Jughrâfiyâ fî 'l-aqâlîm as-sab'a*『7気候帯に関する地理』，Ibn Shaddâd（684/1285年没）の*K. al-A'lâq al-khatîra fî dhikr umarâ' ash-Sha'm wa-'l-Jazîra*『シリアとジャズィーラの君主たちに関する極めて貴重な記述』，Ibn al-Mujâwir（690/1291年頃没）の*K. Sifat bilâd al-Yaman wa-Makka wa-ba'd al-Hijâz*『イエメンの地とメッカと，ヒジャーズの一部との特質』，al-Watwât（718/1318年没）の*K. Mabâhij al-fikr wa-manâhij al-'ibar*『思考の喜悦と考慮の方法』，ad-Dimashqî（727/1327年没）の*K. Nukhbat ad-dahr fî 'ajâ'ib al-barr wa-'l-bahr*『陸と海との諸奇事に関する時代の精髄』，an-Nuwayrî（732/1332年没）の*K. Nihâyat al-arab fî funûn al-adab*『人文学諸分野における必要の限度』，Ibn ad-Dawâdârîの前掲書，Ibn Khaldûn（808/1406年没）の*K. al-'Ibar…*『実例の書』，al-Qalqashandî（821/1418年没）の*K. Subh al-a'shâ fî sinâ'at al-inshâ'*『作文術における夜盲の朝』，al-Maqrîzî（845/1442年没）の*K. al-Mawâ'iz wa-'l-i'tibâr fî dhikr al-khitat wa-'l-âthâr*『新地と旧跡との陳述における警告と考慮』，Ibn al-Wardî（861/1457年没）の*K. Kharîdat al-'ajâ'ib wa-farîdat al-gharâ'ib*『諸奇事の生真珠と諸珍事の貴真珠』，{Ibn ash-Shihna（890/1485年没）のHalab（アレッポ）史}，al-Himyarî（900/1494年没）の*K. ar-Rawd al-mi'târ fî khabar al-aqtâr*『国々の情報に関する香しい庭園』，Ibn Iyâs（930/1523年頃没）の*K. Badâ'i' az-zuhûr fî waqâ'i' ad-duhûr*『時代の出来事に関する新奇な花々』，al-Manûfî（931/1524年没）の*K. al-Fayd al-madîd fî akhbâr an-Nîl as-sa'îd*『幸福なナイルの情報に関する長期の洪水』などに利用・引用される。

また，al-Mas'ûdîの全地歴書の総括・補遺と考えられる『提言と再考』は，全体が83章からなり，地理に関しては第5章が大地とその形状，第6章が7 iqlîm，第7章が7 iqlîmの7星分配，第8章が第4 iqlîm，第9章が海洋とその数，第10章がHabasha海，第11章がRûm海，第12章がKhazar海，第13章がBuntusの海（黒海），第14章が周海を扱い，その他にも，前後の第2章が天体，第3章が季節，第4章が風，第15章が過去の7民族を扱う[13]。

『黄金の牧場と宝石の鉱山』（以下，『黄金の牧場』と略記）に比べると，より学術書に近い記述内容を持っており，地理関係では諸国別の情報が省かれ，代わりに7 iqlîm，特に第4 iqlîm の記述に力が入れられている。なお，al-Mas'ûdî の iqlîm はギリシア起源の「"気候帯"」よりもペルシアの keshvar つまり円状の「国」の意の方が強い[14]。また，Ptolemaeus（168年頃没）の地理書・天文書のほかに Marinus（130年頃没）の地理書（いずれも翻訳？）もあったこと，アッバース朝第7代カリフ al-Ma'mûn の治世（198～218/813～33年）に Sûrat al-Ma'mûn「マァムーン図」と呼ばれる世界地図が作製されたことが『提言と再考』には記されている。この書はその後，al-Bakrî・az-Zuhrî・al-Maqrîzî の各前掲書に利用されるが，その他の書への影響はよく分からない。

Abû Zayd as-Sîrâfî，すなわち Fâris の Sîrâf 出身の Muhammad b. Yazîd（或いは al-Hasan）は，当地の支配者 Mazyad の甥と考えられ，東方への旅人・船乗りと交わり，303/915-16年には，移り住んでいた al-Basra で上述の al-Mas'ûdî とも会っている[15] 豪商のようである。そしてその頃，彼は従来の『中国・インド情報』（237/851年）に自分が集めた新情報を追記して，この書の補遺にしたと考えられる。

この補遺は大凡，as-Sîn，az-Zâbaj（スマトラとジャワで，シュリーヴィジャヤ），再度 as-Sîn と麝香，al-Hind と Sarandîb（スリランカ），az-Zanj と龍涎香，真珠の話からなり，これら各地の風習や事情を述べる[16]。

著者は情報提供者の報告の中で確信を持てるものだけを記そうとしており，単なる 'ajâ'ib を越えて，正確さを追求した書と言えよう。Bânshû（黄巣）の乱，Ibn Wahab の Khumdân（長安）訪問，Maharâja の Qumâr（クメール）遠征，Khânfû（広州）の宦官の不法に対する Khurâsân 商人の反抗の記事など，この補遺は中国およびインド洋諸国の民俗・商業・政治・自然に関する貴重な情報を提供し，al-Mas'ûdî の『黄金の牧場』のほか，通称『諸奇事の要約』，al-Idrîsî の前掲書，al-Qazwînî の『諸国の古跡』などに利用・引用される。

Ibn Fadlân，すなわち Ahmad b. Fadlân b. al-'Abbâs b. Râshid b. Hammâd は，309～10/921～22年にアッバース朝のカリフ al-Muqtadir（第18代，在位295～320/908～32年）が al-Bulghâr の王の許に派遣した使節の一員であり，Baghdâd に帰還後，その旅行の risâla『報告』を著した。

この報告書は序言，al-'Ajam（ペルシア）【平安の都 Baghdâd から Bukhârâ・Khuwârazm（ホラズム）・al-Jurjânîya（グルガンジュ）まで】と al-Atrâk（トルコ系諸部族）【al-Ghuzzîya（オグズ）・al-Bajanâk（ペチェネグ）・al-Bâshghird（バシュコルト）】，as-Saqâliba（実はヴォルガ＝ブルガール），ar-Rûsîya（ルース），al-Khazar からなり，これら各民族の生活・風習や自然環境を描く[17]。

ブルガール王 Almish による国家統一の過程や，オグズ・ブルガール・ルースの各死者埋葬法の描写の他，Jayhûn（アム川）の凍結，オグズとイスラーム教徒との商業協定，バシュコルトの12神他の信仰（アニミズム），ブルガールのオーロラと白夜，ルースの商業神像の崇拝など，西暦10世紀の北方諸民族の社会・文化・自然の諸様相を伝える確かな記録で

ある。そして，この旅行記はal-Istakhrîの前掲書，{al-Mas'ûdîの『黄金の牧場』}，Ibn Hawqal・Yâqûtの各前掲書，al-Qazwînîの『諸国の古跡』，Ibn al-Wardîの前掲書などにも利用・引用され，イスラーム教徒が有する北方の地理的知識の一つの源泉となった。

Abû Dulafの名で知られるMis'ar b. al-Muhalhil al-Khazrajîはal-Hijâzの Yanbu'に生まれ，330/941年頃Khurâsânの Bukhârâのサーマーン朝君主Nasr b. Ahmad（第4代，在位301～31/914～43年）の宮廷に身を寄せていた詩人であるが，331/943年頃，偶々この地を訪れたas-Sîn（実は西ウィグル）の王Qâlîn b. ash-Shakhîrの使節に同行して，その王都まで赴き，Sijistân（スィースターン）に戻るまでの道中を記録に残したと伝えられる。そして，このウィグル（或いはトルキスタン・インド）旅行記は，*K. 'Ajâ'ib al-buldân*『国々の諸奇事』と呼ばれていたのかも知れない[18]。

Mashhad（Meshed）写本と，Yâqûtの前掲書やal-Qazwînîの『諸国の古跡』の引用によれば，往路のal-Atrâk【Bajâ（ヤグマー？），Bajanâk，Jikil（チギル），Baghrâj（ブグラーチ？），Tubbat（ティベット），Kîmâk（キメク），al-Ghuzz，at-Tughuzghuz（実はウィグル），Khirkhîz（キルギス），al-Kharluk（カルルク），Khutlukh ?，al-Khityân（キタイ），Bahî，al-Qulayb ?など】の地と終着地の王都Sandâbil（甘州？），及び復路のal-Hind【Kala（マレー半島のケダ？），Saymûr（チョール），Qashmîr，Mandûrafîn ?，Kûlam（キーロン），Multânなど】の様子を記したものらしい[19]。

この旅行記は実際の部分と想像の部分とが混ざり合い，彼の旅行（殊に帰路）に疑問が持たれているが，中央アジアのトルコ系諸部族の食物・宗教ほかの生活・風習の記事など，かなり細かな情報を提供する。そしてトルキスタンの記事は，仮に彼自身の情報でなかった場合でも，当時イスラーム教徒がこの地域の広範囲にわたってかなりの知識を有していたことを少なくとも立証する。なお，この書の後世への影響はYâqûtとal-Qazwînîの書以外には，al-Bâkûwî（816/1413年以後没）の*K. Talkhîs al-âthâr wa-'ajâ'ib al-malik al-qahhâr*『古跡と強王の奇事との精髄』，Ibn Iyâsの*K. Nashq al-azhâr fî 'ajâ'ib al-aqtâr*『国々の奇事に関する花々の香り』などが挙げられる。

また，Abû Dulafにはイラン旅行記もあり，Mashhad写本によると，340～41/951～53年頃，〈al-Jibâlの〉ash-Shîzから，北方のBâkûya（バクー）やTiflîs，Âdharbayjânと Armîniyaを巡り，その後，南下して〈al-Jibâlの〉Shahrazûrや〈al-'Irâq〉のKhâniqânを訪れ，今度は東進し，〈al-Jibâlの〉Qirmîsîn（Qirmâsîn）や，Hamadhân，Nihâwand，ar-Rayy，Dunbâwandと Tabaristân，〈Qûmisの〉Bistâm，Jurjân（グルガーン）などを経て，Khurâsânの Tûsに至り，そこから引き帰して Naysâbûr（ニーシャープール），Isfahân，al-Ahwâzの Sûq al-Ahwâzや Dawraqなどを巡ったようであり，これら各地の鉱物，遺跡，伝説，水資源，特産物ほかを記している[20]。

この方は前者のトルキスタン・インド旅行記よりは信頼が置けると考えられ，やはり上記のYâqûtとal-Qazwînîの両前掲書に利用・引用されている。

Buzurg b. Shahriyârは Khûzistânの Râmhurmuz出身のイラン系nâkhudhâ（船主）であり，インド洋で活躍する船乗りたちから Fârisの Sîrâfや al-'Irâqの al-Basraほかにおいて聞

いた奇談を集めて，342/953年以降，2巻本と考えられる『インドの諸奇事』を著した。その後，367/977-78年以降に手を加えたようである[21]。
初稿本に基づくvan der Lith版は136話を収めており，その内容はal-Hind・Sarandîb・al-Wâqwâq（ここではマダガスカル島？）・az-Zanj・as-Sîn・az-Zâbajなど，つまりインド洋・シナ海の沿岸と島々の珍しい動物や，これら各地の奇習，そして船乗りたちの冒険の記述である[22]。

前述の『中国・インド情報』補遺よりは真実性において劣るが，al-Wâqwâq住民のQanbaluh（= Qanbalû）襲撃とSufâla（モザンビーク南部）の一部占拠や，奴隷にされたaz-Zanj王のイスラームへの改宗と故国への帰還，Qashmîr王のイスラームへの密かな改宗の話などユニークな記事を含む。また，女護が島や巨大なrukhkh鳥，奇妙な猿の話などは『千夜一夜物語』のスィンドバードの航海談とも一脈通じ，或いはその原型をなすものではないかとも言われている[23]。そして最近，この『インドの諸奇事』はその改訂本がal-'Umarî（749/1349年没）の*K. Masâlik al-absâr fî mamâlik al-amsâr*『大都市を持つ諸王国についての洞察の道筋』に収録されていることが明らかになった[24]が，その他の後世の書物への影響は不明である[25]。

Ibn Sulaym al-Uswânî，すなわちas-Sa'îd（上エジプト）のUswân（アスワン）出身のAbû Muhammad 'Abd Allâh b. Ahmadは，362/973年以前にファーティマ朝の将軍Jawhar as-Siqillî（381/991年没）によりan-Nûba（ヌビア）のキリスト教王国に派遣されたdâ'î（宣教員）・使節である。王をイスラームに改宗させることは出来なかったが，an-Nûba南部にまで足を踏み入れ，al-Qâhira（カイロ）に帰還後，カリフal-'Azîz（ファーティマ朝第5代，在位365～86/975～96年）のために，『ヌビアとマクッラとアルワとベジャとナイルとの情報』（或いは*K. Akhbâr an-Nûba*『ヌビア情報』）を著したと伝えられる[26]。

現存しないこの書は，al-Maqrîzîとal-Manûfîの各前掲書の引用に従えば，an-Nîlに沿ってan-Nûba各地を描写したものであり，北からMarîs【北端al-Qasr，首都Bakhurâs，上Maqs・Saqlûdhâ両地方，南端Bastû】，Maqurra【Baqûn地方など，首都Dunqula】，'Alwa【北端al-Abwâb，首都Sûba】とan-Nîl支流【東流（アトバラ川），白いan-Nîl，緑のan-Nîl（青ナイル），氾濫など】を記述し，al-Buja（ベジャ）にも言及している[27]。

彼の優れたフィールド・ワークの産物であり，ヌビアの，少なくとも西暦10世紀のそれに関する貴重な資料（ヌビアの3キリスト教国の存在など）を提供し，アラビア語文献ではこれ以上に詳しく正確なヌビアとナイル上流の記述は知られていない。この書はal-Maqrîzî・al-Manûfîの各前掲書のほか，Ibn Iyâsの『国々の奇事に関する花々の香り』などにも利用・引用される[28]。

また，al-Mas'ûdîの作品との関連性がある'ajâ'ib書，通称『諸奇事の要約』は，世界全体（アラブを中心とする人類史）を扱う第1部とMisrだけ（エジプト列王史）を扱う第2部とからなり，地理関係では，第1部中に，大地とそこにある物事，周海とそこにある諸奇事【Tinnîs（エジプトの）の情報，緑の海（ここでは外海）にある島々，Sîdûn島（不明）ほか，東とas-Sînとの海（シナ海）の島々，Harkandの海（ベンガル湾）の島々やas-Sîn

の地，'Umân や al-Yaman の海（アラビア海）にある島々，西の地の島々】，更には，〈Nûh（ノア）の息子 Hâm（ハム）の子供たちの記述の中で〉，黒人の Ghâna や an-Nûba や az-Zanj ほかの国々，｛al-Hind や as-Sind，al-Barbar（ベルベル）など｝，〈Nûh の息子 Yâfith（ヤペテ）の子供たちの記述の中で〉，Yâjûj（ゴグ）と Mâjûj（マゴグ），as-Saqâliba，al-Yûnânîyûn（ギリシア人），as-Sîn，al-Ankubarda（= an-Nawkubard），al-Ifranj，al-Andalus，al-Burjân（ドナウ＝ブルガール人），at-Turk，ar-Rûm，al-Furs（ペルシア人）と Khurâsân に関する記述などが含まれ，第2部の中にも，Misr の諸奇事が含まれている[29]。

この書は，882/1477年の写本では al-Mas'ûdî 著の *Kitâb Akhbâr az-zamân wa-man abâda-hu 'l-hidthân wa-'ajâ'ib al-buldân wa-'l-ghâmir bi-'l-mâ' wa-'l-'umrân*『時代と，時の中に消え去った者との情報，そして，国々と水中（海）と建造物（陸）との奇事』，953/1546年の写本では *Kitâb Mukhtasar al-'ajâ'ib wa-'l-gharâ'ib*『諸奇事と諸珍事との要約』と呼ばれており，後者の著者は従来，Ibrâhîm b. Wasîf Shâh とされてきた[30]。ところが最近，この書は al-Mas'ûdî が自著 *K.〈Akhbâr az-zamân al-musammâ bi-〉al-Awsat*『中間の書』から抜き出した作品であり，この第2部は Ibrâhîm b. Wasîf Shâh ではなく，Ibn Wasîf as-Sâbi'（360/971年頃没）によるエジプト関係の書を al-Mas'ûdî が引用したのだとする見解が出てきた[31]。なお，書名に関しては，この書の少なくとも第1部は『国々の諸奇事』とも呼ばれていたらしい[32]。いずれにしろ，この書の第1部中に見られる，緑の海にある島々，東と as-Sîn との海の島々，Harkand の海の島々に関する記述は，スィンドバード航海談の記述と類似する箇所が多く，前述の『インドの諸奇事』以上に『千夜一夜物語』とのつながりを感じさせる[33]。この作品は以後，al-Bakrî の『諸道と諸国』のほか，al-Maqrîzî の前掲書などにも引用・利用されたのではなかろうか[34]。

その他，al-Andalus の Turtûsha（トルトサ）のユダヤ教徒商人（おそらく奴隷商）Abrâhâm ben Ya'qôb すなわち Ibrâhîm b. Ya'qûb al-Isrâ'îlî at-Turtûshî が，後ウマイヤ朝カリフ al-Hakam II al-Mustansir（第9代，在位350～66/961～76年）のために？　著したヨーロッパ旅行の記録もあったらしい[35]。

｛al-'Udhrî（478/1085年没）の *K. Nizâm al-marjân fî 'l-masâlik wa-'l-mamâlik*『諸道と諸国に関する一連の真珠』｝と al-Bakrî の前掲書や al-Qazwînî の『諸国の古跡』に拠ると，この商人は上述のカリフの使節団の一員として？，大西洋に沿って，Burdhîl（Burdâl, ボルドー），Rudhûm（Rutûmâghus, ルーアン）を通り，Intriht（ユトレヒト）など北海沿岸に至り，そこからは内陸部へ向かい，Mughânja（Mayanssa, マインツ），Abûlda（フルダ）などに立ち寄り，354/965年 Mâdhî Burgh（マグデブルグ）で Hûtuh（オットー）大帝に拝謁したようである。そこで大帝から中央ヨーロッパの情報を聞き，Ifrâgha（プラハ），Karâkwa（クラクフ），Asht（Auzburk, アウグスブルク）ほかを巡った後，Siqillîya（シチリア島）の Bânî wa-Arîsha（Trâbanish, トラパニ）　などを経て戻ってきたようである。そして，彼はこの時代のフランス王国と神聖ローマ帝国やポーランドほかのスラブ人諸国の実情を記したとされる[36]。

とりわけ，al-Bakrî が引用する西暦10世紀のいわゆるスラブ人の4王国に関する記述は

貴重なものと言われる[37]が，このユダヤ教徒商人の記録なるものはal-'Udhrîとal-Bakrîとal-Qazwînîの各前掲書のほか，Ibn Sa'îd・Abû 'l-Fidâ'・ad-Dimashqî・al-Bâkûwî・al-Himyarîの各前掲書などにも引用・利用されている。

更には，al-Mas'ûdîの『提言と再考』やIbn an-Nadîm（385/995年没）の*K. al-Fihrist*『目録』が言及するIbn Abî 'Awn al-Kâtibすなわち Abû Ishâq Ibrâhîm（或いはMuhammad）b. Ahmad b. an-Najm（322/934年没）の*K. an-Nawâhî wa-'l-âfâq*『諸地方と諸国』或いは*K. an-Nawâhî fî akhbâr al-buldân*『国々の情報中の諸地方』も，国々の情報と陸海の多くの奇事を扱ったものらしい[38]。

（3）

al-Balkhîすなわち Khurâsânの Balkh近郊に生まれた Abû Zayd Ahmad b. Sahlは，若い頃にal-'Irâqに遊学して既述（前稿Ⅲ）の大学者al-Kindî（260/874年頃没）の弟子となり，長じて哲学や宗教諸学の大家として活躍し，サーマーン朝の書記官も務めた人物で，309/921年頃，地理書『諸州の姿』（別名*K. Ashkâl al-aqâlîm*『諸州の姿』，*K. Ashkâl al-bilâd*『国の姿』，*K. Taqwîm al-buldân*『国々の調査表』）を著したと伝えられる[39]。

この書は現在は不明であるが，al-Muqaddasîの言及に従えば，イスラーム帝国を20のiqlîm（ここでは，州の意）に分け，各iqlîmを地図で表し，その地図に説明を付けた書のようである[40]。そこでこのal-Balkhîの書は，イスラーム世界だけを扱い，かつ明確な州区分を行ない，地図を配置するこの世紀の特徴的な地誌の原形とみなされ，この形態の地誌は，一般に彼の名をとってBalkhî学派の地誌とも呼ばれる[41]。そして，彼の地理書はal-Istakhrî・{Ibn Hawqal}・al-Muqaddasî（以上，全てBalkhî学派）の各前掲書は勿論，Yâqût・Ibn al-'Adîm・Ibn Shaddâd・ad-Dimashqî・an-Nuwayrî・al-Maqrîzî・Ibn al-Wardî・Ibn ash-Shihnaの各前掲書などに利用・引用される。

なお，al-Balkhîの書がAbû Ja'far al-Khâzin（Abû Ja'far Muhammad b. al-Hasan al-Khurâsânî, 350/961年以後没，サービア教徒の天文学者・数学者）の諸地図の説明に過ぎないと言う説もある[42]。

Qudâmaすなわち Abû 'l-Faraj Qudâma b. Ja'farは，al-'Irâqのal-Basraのキリスト教徒（アルメニア人？）の家に生まれ，早くからアッバース朝の官吏（彼はal-Kâtib（書記官）と呼ばれる）となり，カリフal-Muktafî（第17代，在位289～95/902～08年）の要請でイスラーム教徒に改宗して中央官庁の高い地位（税務庁長官？）に就いた人物で，優れたadîbでもある。彼は316/928年頃，主著として『租税と書記術』という8部からなる行政百科を書き上げた[43]が，現在に伝わるのは第2巻たる後半の4部だけである。

地理に関しては，第5部第11章が駅逓庁，東方〈と西方〉への駅逓路・街道【平安の都（Baghdâd）からMakka・al-Yamanへの道と各地からのMakkaへの道，平安の都からal-Ahwâz・Fâris・Isbahân・Kirmân・Sijistânへの道，平安の都から他の東方：Hamadhân・Marw（メルヴ）・Samarqand・Farghâna（フェルガナ）などへの道，平安の都からÂdharbayjân・Armîniyaへの道，平安の都から西方：ar-Raqqa・Dimashq・al-Fustât・al-Qayrawânなどへ

の道，平安の都から〈東南へ〉Istakhr・〈東北へ〉Mushkûya・〈北へ〉Bardha'a ほか・〈西へ〉Jubb ar-Raml までの駅逓路】，第6部第1章が大地の形態・体積・面積・位置・居住地，第6部第2章が大地の居住地域の区分【Sâm（セム）と Hâm と Yâfith に3区分，al-Furs による4区分，ar-Rûm 人による Arûfâ（ヨーロッパ）・Lûbiya（リビヤ）・大 Âsiya（アジア）への3区分，“気候帯”による7区分】，第3章が居住地域の海洋の位置と海洋の距離と海洋の島々【大東海（インド洋），ar-Rûm と Misr の海（地中海），Buntus（sic. Quntûs）の海，Jurjân の海（カスピ海）】，第4章が居住地域にある山岳【第1気候帯の前（南）～第7気候帯にある山岳の数および有名な山の名前と大きさ】，第5章が居住地域にある河川・泉・湿地【第1気候帯の前（南）～第7気候帯の後ろ（北）にあるそれらの数や有名な河川】，第6章がイスラーム帝国とその諸地方・税収高【as-Sawâd の行政区分と税収高など，東方：al-Ahwâz・〈al-Jibâl〉以東と，西方：〈al-Jazîra〉以西・Âdharbayjân と，南方：〈al-'Arab の島（アラビア半島）〉との行政区分と税収高，再び諸地方の税収高】，第7章がイスラーム帝国諸辺境とその周辺の民と山岳【ar-Rûm との辺境，ar-Rûm の軍制，at-Turk など東北辺境，南・西辺境】を記述する[44]。

これら地理部分は前世紀の Ibn Khurdâdhbih の『諸道と諸国』（272/885 年頃）と同様，行政の3大テーマすなわち道程・租税高・辺境事情の記述（4方別，al-'Irâq 中心）が主となっており，職業柄か，各地の租税高の記述は Ibn Khurdâdhbih の書のそれよりも詳しい。そして『租税と書記術』は，al-Mas'ûdî の『黄金の牧場』，Ibn Hawqal・al-Muqaddasî・{al-Muhallabî}・al-Idrîsî・Yâqût・Sibt b. al-Jawzî・al-Watwât・ad-Dimashqî・an-Nuwayrî・Ibn ad-Dawâdârî・al-Maqrîzî の各前掲書などに利用・引用される。

al-Istakhrî，すなわち Fâris の Istakhr 出身とされる Abû Ishâq Ibrâhîm b. Muhammad al-Fârisî は，イラン系の人物で，少なくとも al-'Arab の地（アラビア半島）・al-'Irâq 以東，Mâ warâ' an-nahr（トランスオクシアナ）までのイスラーム圏を巡り歩き，340/951 年頃『諸道と諸国』（別名 *K. Masâlik al-mamâlik*『諸国の諸道』）を著した[45]。

この書は序章，al-'Arab の地，Fâris の海（ペルシア湾），al-Maghrib（al-Andalus を包含），Misr，ash-Sha'm，ar-Rûmの海，al-Jazîra，al-'Irâq，Khûzistân，Fâris，Kirmân，as-Sind，Armîniya と ar-Rân と Âdharbayjân，al-Jibâl，ad-Daylam，al-Khazar の海，Khurâsân の沙漠（カヴィール・ルート両沙漠），Sijistân，Khurâsân，Mâ warâ' an-nahr（Khuwârazm を包含）の21章からなり，各章に地図が付いており，内容は序章が世界の海洋と主な土地の紹介で，al-'Arab の地の章以下は，それぞれの境域，主な地方や都市，旅程などの記述となっており，故郷の Fâris だけは，更に風土・住民・財源といった項目の説明もある[46]。al-Istakhrî の書は上述の al-Balkhî の書を骨格に，自らの旅行で集めた資料によって肉付けした作品と考えられるが，かなり体系的な地誌となっている。そして地図は，al-Balkhî に拠っているのだろう[47]が，経緯度に基づくものではなく，直線や円の多い半ば幾何的な図（一種の道案内図）となっている。これはサーサーン朝ペルシアの影響を受けたものと言われ[48]，後述の Ibn Hawqal・al-Muqaddasî の各地図共々，既述（前稿Ⅲ）の al-Khuwârazmî（236/850 年頃没）以来の Ptolemaeus 系統の経緯度を用いる地図と，イスラーム地図学を言わば2分する。ま

た，「州・地方」iqlîm による居住地域の区分は，Ptolemaeus 系統の「“気候帯”」iqlîm によるそれより，ペルシアの keshvar の影響を受けたとは言え，分かりやすいものであり，以後，「諸道と諸国の学」ではこの iqlîm の方が多く用いられる（なお，「経度と緯度の学」は専ら「“気候帯”」iqlîm を使う）[49]。al-Istakhrî の『諸道と諸国』はその後，特にペルシア語世界で評判を博する[50] が，Ibn Hawqal と al-Muqaddasî の前掲書は勿論，al-Bakrî・Yâqût・Ibn al-'Adîm の各前掲書，al-Qazwînî の両前掲書，Abû 'l-Fidâ' の前掲書などに利用・引用される。

Ibn Hawqal の名で知られる Abû 'l-Qâsim Muhammad b. 'Alî は，al-Jazîra の Nasîbîn 出身（彼は an-Nasîbî と呼ばれる）ではないかと考えられる[51] が，若い頃から地理学に関心を持ち，331/943 年に Baghdâd を旅立って以来，商売をしながら，東は Mâ warâ' an-nahr から西は al-Maghrib・al-Andalus・Siqillîya までイスラーム圏のほぼ全域を巡り歩いた人物である。ファーティマ朝の Misr 訪問後，イスマーイール派の dâ'î になったとも言われる[52] が，諸国遍歴の途中，上述の al-Istakhrî に会い，その書の誤謬を直すよう頼まれたらしい[53]。その結果，Ibn Hawqal は 356/967 年以前に彼の『諸道と諸国』を脱稿し，Halab のハムダーン朝の君主 Sayf ad-Dawla（在位 333 ～ 56/945 ～ 67 年）に献じたと言われる[54]。その後，別人に献じるためか，367/977 年頃と 378/988 年頃の 2 度にわたり手を加えて，最終的には『大地の姿』という題名の作品を完成させたと考えられる。

Ibn Hawqal の『大地の姿』は，序章（＋大地の姿），al-'Arab の地，Fâris の海，al-Maghrib（＋ al-Andalus ＋ Siqillîya），Misr，ash-Sha'm，ar-Rûm の海，al-Jazîra，al-'Irâq，Khûzistân，Fâris，Kirmân，as-Sind，Armîniya と Âdharbayjân と ar-Rân，al-Jibâl，ad-Daylam と Tabaristân，al-Khazar の海，Khurâsân と Fâris との沙漠，Sijistân，Khurâsân，Mâ warâ' an-nahr，結章からなり，結章を除く各章は地図が配され，序章は世界全体を紹介し，al-'Arab の地の章以下は，それぞれの境域と地図の説明に始まり，主な地方や都市，旅程，収税などを記述する[55]。

この書は一見すると，al-Istakhrî の書の記述をほぼ踏襲している印象が否めない。しかし，al-Maghrib・al-Andalus・Siqillîya の記述は殆どが独自なものであり，Misr，al-'Irâq，Mâ warâ' an-nahr などに関しても，自らの旅行と観察に基づいた記述は単なる修正を越えたものがあり，特に経済関係の記事にそれが多く見られる。また，地図もより詳しくなっている。そして，al-Istakhrî がアラビア語に多少の難があったこともあり，アラビア語世界では Ibn Hawqal の書の方がより評判を博し[56]，al-Muhallabî・{al-Muqaddasî}・al-Bakrî・al-Idrîsî・Yâqût・Sibt b. al-Jawzî・Ibn Sa'îd ・Ibn al-'Adîm の各前掲書，al-Qazwînî の『諸国の古跡』，Ibn Shaddâd・al-Watwât・ad-Dimashqî・Abû 'l-Fidâ'・an-Nuwayrî・Ibn ad-Dawâdârî ・al-'Umarî・Ibn Khaldûn の各前掲書，Ibn Duqmâq（810/1407 年没）の *K. al-Intisâr li-wâsita 'iqd al-amsâr*『諸都市の中心への左袒』，al-Qalqashandî・al-Maqrîzî・Ibn ash-Shihna の各前掲書，Ibn Mâjid（906/1500 年頃没）の *K. al-Fawâ'id fî usûl 'ilm al-bahr wa-'l-qawâ'id*『航海学の原理と基礎に関する有益な事柄』などに利用・引用される。

al-Muhallabî の名で知られる Abû 'l-Husayn al-Hasan b. Ahmad は Misr の人（彼は al-Misrî

と呼ばれる）と言われ，既述のファーティマ朝カリフ al-'Azîz の時代，特に地理学の分野で活躍した人物で，詩人でもあったらしい。375/985 年？，このカリフに捧げる大作『諸道と諸国』（*K. al-'Azîzî*『アズィーズの書』とも呼ばれる）を書き上げたと伝えられる。

未発見に近いこの書は，Yâqût と Abû 'l-Fidâ' と al-Qalqashandî の各前掲書の引用に従えば，街道や都市の記述に重きを置いた書であるが，扱う範囲は al-'Arab の島をはじめ，東は Mâ warâ' an-nahr から西は al-Andalus に至るまでの全イスラーム圏だけでなく，as-Sûdân，al-Qustantînîya・Rûmiya（ローマ）・Jalâliqa ほかの北方，al-Hind，東海（インド洋）の島々といったイスラーム圏周辺諸地域にも及んでいる[57]。

いわゆる Balkhî 学派の書とは異なるようだ（尤も，al-Ya'qûbî の『国々』（276/889 年頃）と比べれば，この学派の書により近い）が，Yâqût・Abû 'l-Fidâ'・al-Qalqashandî の各前掲書のほか，Abû Ja'farJamâl ad-Dîn al-Idrîsî（649/1251 年没）の *K. Anwâr 'ulûw al-ajrâm fî 'l-kashf 'an asrâr al-ahrâm*『ピラミッドの秘密を発見するための最上星の光』，Ibn al-'Adîm の前掲書，al-Qazwînî の『諸国の古跡』，Ibn Shaddâd・Ibn ash-Shihna の各前掲書にも利用・引用されている[58]。

また，al-Muhallabî は著名な天文学者 Ibn Yûnus（399/1009 年没）と共に，カリフ al-'Azîz のために世界地図を作成したとも言われる[59] が，こちらの方はよく分からない。

al-Muqaddasî 或いは al-Maqdisî，すなわち al-Bayt al-muqaddas 或いは Bayt al-maqdis（共にエルサレムのこと）出身の Abû 'Abd Allâh Muhammad b. Ahmad b. Abû Bakr al-Bashshârî は，356/967 年に Makka 巡礼を行なって以来，イスラーム圏を Mâ warâ' an-nahr から al-Maghrib まで，様々な職業に就きながら（ある時期からはイスマーイール派の dâ'î ？）巡り歩いた人物で，375/985 年，地理書『諸州の知識に関する最良の区分』という地理書を著し，サーマーン朝に献じ，その 3 年後，それに手を加えたものを今度はファーティマ朝に献じたらしい[60]。

この書は序章，海洋と河川，名前とその相違，諸州の特色，諸学派と庇護民，観察した基本項目，意見の異なる諸所，法学者のための要約【各県都とその都市圏】，世界の 7 "気候帯" とキブラの方向，イスラーム帝国，al-'Arab の島州，al-'Irâq 州，Aqûr（= al-Jazîra）州，ash-Sha'm 州，Misr 州，al-Maghrib（al-Andalus を含む）州，al-'Arab〈諸州間〉の荒野（シリア沙漠），al-Mashriq（= Mâ warâ' an-nahr と Khurâsân と Sijistân）州，ad-Daylam 州，ar-Rihâb（= Âdharbayjân と ar-Rân と Armîniya）州，al-Jibâl 州，Khûzistân 州，Fâris 州，Kirmân 州，as-Sind 州，これら al-'Ajam（非アラブ）諸州間の沙漠（イラン大沙漠）からなる。al-'Arab の島州以下は，各州ごとに概要【特徴，土地区分，主要都市の概観など】と諸事情【風土と特異集団，宗派と法学派とクルアーン読誦の流派，言語，交易，特産，度量衡と通貨，風習，水，鉱物，霊場，奇事，統治，租税など，最後に道程】が記される[61]。そして，各州の特徴の後に彩色の地図が付いていたと考えられる[62]。

al-Muqaddasî の書は自らの観察結果を拠り所とし，足らない部分だけを先人たちの書物や信頼の置ける人物たちからの情報で補うという "科学" 的な記述を目指した作品であり，内容も Balkhî 学派のそれまでの書よりも多項目にわたり，より体系立った地誌となってい

る[63]。但し，地図だけは，現存のもので見る限りは，al-Istakhrî の地図とあまり変わっていない。以後，『諸州の知識に関する最良の区分』を凌駕するイスラーム圏地誌は現れなかったと言い得るが，残念ながら，Yâqût の前掲書と al-Qazwînî の『諸国の古跡』ぐらいしか，この書を利用・引用したことがはっきりしない。

〈続〉

前稿の註の残り

55) *'Arrâm, Kitâb Asmâ' jibâl Tihâma wa-jibâl Makka wa-'l-Madîna*, ed. Muhammad Sâlih Shannâwî, Beirut：Dâr al-Kutub al-'Ilmîya, 1410/1990；*Kitâb Asmâ' jibâl Tihâma wa-sukkân-hâ*, ed. 'Abd as-Salâm Muhammad Hârûn, Cairo：Matba'at Lajnat at-Ta'lîf wa-'t-Tarjama, 1373/1956。Ibn al-Kalbî の『国々の語源』は，Yâqût［*Mu'jam*, I，p.7］に拠る。al-Asmâ'î の『アラビア半島（アラブの島）』と『アラブの諸水（水場）』とは，Ibn an-Nadîm［p.55］に拠る。この『アラビア半島（アラブの島）』は，後ほど10世紀で扱う Lughda al-Isbahânî 著とされる *Bilâd al-'Arab*『アラブの地』との関係が取りざたされており，また，『アラブの諸水（水場）』は『アラビア半島（アラブの島）』の別名ではないかと言う説もある［Hamad al-Jâsir, *Bilâd al-'Arab*, Riyadh：Dâr al-Yamâma, 1387/1968, p.40］。al-Asmâ'î にはその他，Ibn an-Nadîm［p.55］に拠れば，*as-Sifât*『諸特質』，*an-Nabât wa-'sh-shajar*『草木』といった作品もあり，これらも地理を扱っているのではなかろうか。なお，上述の al-Harbî の巡礼案内書は，Ibn al-Kalbî や al-Asmâ'î を利用している［pp.531，537］。Abû 'Ubayda の『メッカと聖域』と『溶岩（溶岩性土地）』は，Ibn an-Nadîm［p.54］に拠る。更に，Ibn an-Nadîm［p.194］に拠ると，al-'Ayyâshî（Abû 'n-Nadr Muhammad b. Mas'ûd，9世紀）にも，*K. Makka wa-'l-Haram*『メッカと聖域』という作品があったらしい。Abû Zayd al-Ansârî の『諸水』は，Ibn an-Nadîm［p.55］に，Sa'dân の『両地と諸水と山岳と海洋』は，Ibn an-Nadîm［p.71］に，Shamr b. Hamdawayh の『山岳とワジ』は，Yâqût［*Irshâd*, IV，p.263］に，as-Sukkarî の『水源と町村（或いは荒野）』は，Ibn an-Nadîm［p.78］と Yâqût［*Irshâd*, III，p.63］に，それぞれ拠る。Ahmad Sûsa は，Abû 'Ubayda 以下，as-Sukkarî までのこれらの作品を，アラビア半島に関する著作として挙げている［*ash-Sharîf al-Idrîsî fî 'l-jughrâfiyâ al-'Arabîya*, Part I，Baghdad：Niqâbat al-Muhandisîn fî 'l-Jumhûrîyat al-'Irâqîya, 1974, pp.100～01, 131～33］。その他，al-Bakrî［*Mu' jam mâ ista' jam*（*Das geographische Wörterbuch*），ed. F. Wüstenfeld, I，Göttingen, 1876, pp.4～5］や Yâqût［*Mu' jam*, I，p.7］に拠れば，Abû 'l-Ash'ath al-Kindî（'Abd ar-Rahmân b. 'Abd al-Malik，9世紀）にも，Tihâma の山々に関する作品があったらしい。また，言辞学者 al-Hajarî（Abû 'Alî Hârûn b. Zakarîyâ'，9世紀）の *K. at-Ta'lîqât wa-'n-nawâdir*［ed. Hammûd 'Abd al-Amîr al-Hammâdî，2 vols., Baghdad：Wizârat ath-Thaqâfa wa-'l-I'lâm, Dâr ar-Rashîd, 1980～81］もアラビア半島の水場・山岳・部族・植物などを取り扱っている。

56) *K. at-Tabassur bi-'t-tijâra*, ed. Hasan Husnî 'Abd al-Wahhâb, *Majallat al-Majma' al-'Ilmî al-'Arabî bi-Dimashq*（*Revue de l'Académie arabe de Damas*），XII，1932, pp.326～55；Le Kitâb al-tabassur bi-l-tigâra attribué à Gâhiz, French tr., Ch. Pellat, Gâhiziana, I，Arabica, I，1954, pp.153～65。ただし，Pellat はこの作品を al-Jâhiz 著の193作品中に数えていない［Gâhiziana III，p.177］。また，A. Miquel は Mâ Shâ' Allâh（820年没）の *K. al-As'âr*『価格』という先行作品を挙げる［前掲書，I，p.109］。

57) al-Azdî（al-Basrî），*Futûh ash-Shâm*, ed. William Nassau Lees, Calcutta：Baptist Mission Press, 1854；al-Azdî, *Târîkh futûh ash-Shâm*, ed. 'Abd al-Mun'im 'Abd Allâh 'Âmir, Cairo：Mu'assasat Sijill al-'Arab, 1970。Ibn Zabâla, Akhbâr al-Madîna, In：F. Wüstenfeld, *Geschichte der Stadt Medina nach Samhudi*, Göttingen, 1860。Ibn A'tham al-Kûfî, *K. al-Futûh*, ed. Muhammad 'Abd al-Mu'îd Khân *et al.* 8vols, Hyderabad Deccan：Dâ'irat al-Ma'ârif al-'Uthmânîya, 1388～95/1968～75。al-Wâqidî, *K. al-Maghâzî*, ed. J. Marsden Jones, 3vols, London：Oxford University Press, 1966。al-Azraqî, *Akhbâr Makka*（*Die Geschichte und Beschreibung der Stadt Mekka von al-Azraqî*），ed. F. Wüstenfeld, Leipzig：F.A. Brockhaus,

1858；al-Azraqî, *Akhbâr Makka*, ed. Rushdî as-Sâlih Milhis, Makka：al-Matba'a al-Mâjidîya, 1352/1933。Ibn 'Abd al-Hakam, *Futûh Misr wa-akhbâr-hâ*(*The History of the Conquest of Egypt, North Africa and Spain*), ed. Charles C. Torrey, New Haven：Yale University Press, 1922。{'Umar} b. Shabba, *Ta'rîkh al-Madîna al-munawwara*, ed. Fuhaym Muhammad Shaltût, 4vols, Jedda：Bakrî Shaykh Amîn, n.d.；'Umar b. Shabba, *K. Akhbâr al-Madîna*, ed. S. al-Ghannâm, PhD thesis, Manchester University, 1973。Al-Ya'qûbî, *Ta'rîkh* は註48を参照。al-Fâkihî, *Ta'rîkh Makka* (*Auszüge aus al-Fâkihî*), ed. F. Wüstenfeld, *Die Chroniken der Stadt Mekka*, vol. II, Leipzig：F.A. Brockhaus, 1859；al-Fâkihî, *K. Akhbâr Makka*, ed. Fawwâz 'Alî Junaydib ad-Dahhâs, 2vols., PhD thesis, the University of Exeter, 1983。al-Balâdhurî, *Futûh al-buldân*(*Liber expugnationis regionum*), ed. M.J. de Goeje, Leiden：E.J. Brill, 1866；al-Balâdhurî, *Futûh al-buldân*, ed. 'Abd Allâh Anîs at-Tabbâ' & 'Umar Anîs at-Tabbâ', Beirut：Dâr an-Nashr li-'l-Jâmi'îyîn, 1377/1958。{Ibn Abî Tâhir} Tayfûr, *Kitâb Baghdâd* (*Sechster Band des Kitâb Baġdâd*), ed. Hans Keller, Leipzig：O. Harrassowitz, 1908；Ibn Abî Tâhir Tayfûr, *Kitâb Baghdâd*, ed. Muhammad Zâhid b. al-Hasan al-Kawtharî, Cairo：Maktabat al-Khângî, 1368/1949。Bahshal, *Ta'rîkh Wâsit*, ed. Gurgîs 'Awwâd, Baghdad：Matba'at al-Ma'ârif, 1387/1967。

Ibn Qutayba, *'Uyûn al-akhbâr*. ed. C. Brockelmann, 4vols., Weimar-Strassburg, 1898～1908；Ibn Qutayba, *Kitâb 'Uyûn al-akhbâr*. 4vols., Cairo：Dâr al-Kutub al-Misrîya, 1343～48/1925～30 [reprint. Cairo：Al-Mu'assasa al-Misrîya al-'Âmma li-'t-Ta'lîf wa-'t-Tarjama wa-'n-Nashr, 1964]。Ibn Qutayba, *Kitâb al-Ma'ârif* (*Handbuch der Geschichte*), ed. F. Wüstenfeld, Göttingen, 1850；Ibn Qutayba, *al-Ma'ârif*, ed. Muhammad Ismâ'îl 'Abd Allâh as-Sâwî, Cairo：al-Matba'a al-Islâmîya, 1353/1934 [ed. Tharwat 'Ukâsha, Cairo：Matba'at Dâr al-Kutub, 1960]。al-Jâhiz, *al-Hayawân* は註31参照。その他，Yâqût [*Mu'jam*, I, pp.695～6, II, pp.134, 539, III, p.920] が利用する Ahmad b. Sayyâr (Abû 'l-Hasan, b. Ayyûb al-Marwazî, 881年没) の Marw 史や，Ibn 'Abd al-Hakam の『エジプト征服史』の主要なソースの一つで，al-Bakrî の『諸道と諸国』も利用する Sa'îd b. 'Ufayr (840年没) の al-Andalus 史 [A. Ferré, Les sources du Kitâb al-masâlik wa-l-mamâlik d'Abû 'Ubayd al-Bakrî, *IBLA* (Tunis) 49, 1986, pp.193～94]，後述する Ahmad ar-Râzî の al-Andalus 誌や al-Bakrî の『諸道と諸国』も利用する 'Abd al-Malik b. Habîb as-Sulamî (852年没) の *Ta'rîkh*『歴史』[A. Ferré, 上掲論文, pp.195～96] なども，地理情報を含んでいる。

58) Ibn an-Nadîm [p.52] に拠れば，この書は5部からなり，第1部は人間の性格，第2部はテントと家屋，山岳と裂け目，道具，第3部は駱駝，第4部は太陽と月や，ミルクと茸，井戸や水槽など，第5部は作物，葡萄，草木，風，雲，雨を扱っている。

前稿の訂正箇所

① p.193　al-Khuwârizmî の地理書の利用・引用として，Ibn al-Faqîh (903年以後没) の *K. al-Buldân* と ad-Dimashqî (1327年没) の *K. Nukhbat ad-dahr fî 'aja' ib al-barr wa-'l-bahr*『陸と海との奇事に関する時代の精髄』とを追加。

② pp.198 ～ 99　Ibn Khurdâdhbih の地理書の利用・引用として，Qudâma の前掲書と Ibn al-Qâss (946年没) の *K. Dalâ'il al-qibla*『キブラ案内』と al-Himyarî (1494年没) の *K. ar-Rawd al-mi'târ fî khabar al-aqtâr*『国々の情報に関する香しい庭園』とを追加。

③ p.200　al-Ya'qûbî の『国々』の利用・引用から，(de Goeje は挙げているが) Ibn Taghrî Birdî (1469年没) の *K. an-Nujûm az-zâhira fî mulûk Misr wa-'l-Qâhira* を削除。

④ p.201 'Arrâm の *K, Asmâ' jibâl Tihâma wa-sukkân-hâ*『ティハーマの山々とその住民の名前』を *K. Asmâ' jibâl Tihâma wa-jibâl Makka wa-'l-Madîna*『ティハーマの山々やメッカとメディナの山々の名前』に変更。

⑤ p.201 al-Azraqî の *K. Akhbâr Makka* の利用に al-Bakrî の『諸道と諸国』を追加。

⑥ pp.201 ～ 02　al-Balâdhurî の *K. Futûh al-buldân* の利用に Qudâma の前掲書を追加。

本稿の註

1）André Miquel［*La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11e siècle*, vol. Ⅰ，Paris & The Hague：Mouton, 1967］に従う。

2）al-Muqaddasî, *K. Ahsan at-taqâsîm fî ma'rifat al-aqâlîm* (*Descriptio imperii moslemici*), ed. M. J. de Goeje, BGA. Ⅲ，Leiden（Lugduni-Batavorum）：E. J. Brill, 1877―以下，この書を *Ahsan* と略記―, p.5。また，Ibn an-Nadîm［*Kitâb al-Fihrist*, ed. Gustav Flügel, vol. Ⅰ，Leipzig, 1871―以下，書名を省略し，Ibn an-Nadîm とだけ表記―, p.154］はこの書が約 1000 葉と言っている。

3）Mashhad（Meshed）〈Ridawîya 図書館〉写本 5229―以下，これを Mashhad 写本と呼ぶ―。なお，この Mashhad 写本［folia 173a］はこの書を *Kitâb Akhbâr al- buldân* と記す。

4）*Mukhtasar Kitâb al-Buldân*（*Compendium libri Kitâb al-Boldân*), ed. M. J. de Goeje, BGA. Ⅴ，Leiden：E. J. Brill, 1885, pp.1-330。A. Miquel［前掲書，pp.157-60］は，この ash-Shayzarî の *Mukhtasar* がその内容と構成に関しては原テキストに近く，原テキストの大凡 81%を伝えていると言う。

5）Mashhad 写本 folia 1b-173a［*Collection of Geographical Works by Ibn al-Faqîh, Ibn Faḍlân, Abû Dulaf al-Khazrajî*, ed. Fuat Sezgin, Frankfurt am Main：Institut für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften, 1987―以下，この書を *Collection* と略記―, pp.1-347］。なお，前記の ash-Shayzarî の *Mukhtasar* とこの Mashhad 写本とを併せたテキストに，*Kitâb al-Buldân*, ed. Yûsuf al-Hâdî, Beirut：'Âlam al-Kutub, 1416/1996, pp.55-649―上記の註 4 の部分も含む―がある。

6）後述する al-Muqaddasî の *Ahsan*,［p.4］も，この書は al-Jâhiz の *K. al-Amsâr* に似ていると言う。その他，Ibn an-Nadîm［p.219］は，この書の主な情報源を後述する al-Jayhânî とする。

7）*Ahsan*, pp.4, 241。

8）Charles Pellat［Mas'ûdî et l'Imâmisme, *Le Shî'isme Imâmite*, ed. R. Brunschvig & T. Fahd, Paris, 1970, p.70］をはじめ，Tarif Khalidi［*Islamic Historiography The Histories of Mas'ûdî*, Albany：State University of New York Press, 1975, p.xvi］や Ahmad Shboul［*Al-Mas'ûdî & his World*, London：Ithaca Press, 1979, p.16］などは，Mas'ûdî が 12 イマーム派であったと考える。他方，A. Miquel［前掲書，pp.205-06］や M. S. Khân［Al-Mas'ûdî and the Geography of India, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 131, 1981, p.120］はイスマーイール派説をとる。

9）『黄金の牧場』と『提言と再考』のほか，『時代の情報』，*al-Kitâb al-Awsat*『中間の書』，*K. Funûn al-ma'ârif wa-mâ jarâ fî 'd-duhûr as-sawâlif*『各種の知識と過去の時代に起こったこと』，*K. Dhakhâ'ir al-'ulûm wa-mâ kâna fî sâlif ad- duhûr*『諸学の財宝と過去の時代にあったこと』，*K. al-Istidhkâr li-mâ jarâ fî sâlif al-a'sâr*『過去の時代に起こったことの回顧』があったらしい。詳細は拙稿「マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三～第六章をめぐって（1）」『大阪外国語大学論集』4, 1990, pp.288-90 を参照。

10）*Murûj adh-dhahab wa-ma'âdin al-jawhar*（*Les prairies d'or*), revised ed. Ch. Pellat, Beirut：al-Jâmi'at al-Lubnânîya（l'Université Libanaise）―以下，この版を *Murûj* と略記―, vol. Ⅰ，1965, pp.148, 151。

11）*Murûj*, vol. Ⅰ，pp.84-244, vol. Ⅱ，1966, pp.44-45, 65-152, 179-89, 360-411。その他，第 46 章が al-'Arab・al-Barbar・al-Akrâd（クルド）の遊牧民，第 48 章～第 53 章が al-'Arab の魔霊や占い，第 54 章～第 60 章が暦，第 61 章が太陽と月を扱っている。

12）西暦 10 世紀のアラビア語地理作品の中では，『黄金の牧場』はインドやスラブ関係を中心に特に研究が多い。代表的と思われるものだけでも，*Al-Mas'ûdî Millenary Commemoration Volulme*, ed. S. Maqbul Ahmad & A. Rahman, Aligarh：Aligarh Muslim University, 1960 や，F. -B. Charmoy, Relation de Mas'oudy et d'autres auteurs musulmans sur les anciens Slaves, *Mémoires de l'Académie impériale des sciences de St. -Pétersbourg*, Ⅵ e série, 2, 1834, pp.297-408；J. J. Modi, Mas'ûdî's account of the Pesdadian Kings, *Journal of the K. R. Cama Oriental Institute*, 27, 1933, pp.6-35；V. V. Barthold, Arabskie Izvestia o Rusakh, *Sovetskoe Vostokovedenie*, 1, 1940, pp.15-50；J.Widajewicz, Mas'ûdî o Wieletach, *Pamietnik Slowianski*, 1, 1949, pp.55-82；T. Lewicki, Swiat slowianski w oczach pisarzy arabskich（Le monde slav vu par les écrivains arabes), *Slavia Antiqua*, 2, 1949, pp.321-88；*Ibid.* Jeszcze o Wieletach w opisie slowianszczyzny arabskiego pisarza sXw. al-Mas'ûdî'ego, *Pamietnik Slowianski*, 2, 1951, pp.107-20；S.

Maqbul Ahmad, Al-Mas'ûdî's Contributions to Medieval Arab Geography, *Islamic Culture*, 27(1953), pp.61-77, 28(1954), pp.275-86 などが挙げられる。

13) *Kitâb at-Tanbîh wa-'l-ishrâf* (*Kitâb at-Tanbîh wa'l-Ischrâf*), ed. M. J. de Goeje, BGA. Ⅷ, Leiden：E. J. Brill, 1894—以下，この書を *Tanbîh* と略記—, pp.7-85［2-401］。

14) 拙稿「Iqlīm 考—Yāqūt を基に—」『オリエント』26 の 2, 1983, pp.78-80, 83 参照。

15) *Murûj*, vol. Ⅰ, p.172。

16) (*Relations des voyages faits par les Arabes et les Persans dans l'Inde et la Chine dans IXe s. de l'ère chrétinne*). ed. M. Reinaud, Paris, 1845, pp. 60-148；Sulaymân at-Tâjir & Abû Zayd as-Sîrâfî, *Akhbâr as-Sîn wa-'l-Hind*, ed. Ibrâhîm Khûrî, Beirut：Dâr al-Mawsim li-'l-I'lâm, 1991, pp.59-95。

17) Mashhad 写本 fol. 196b-212b［*Collection*, pp.390-420］；*Risâlat Ibn Fadlân*, ed. Sâmî ad-Dahhân, Damascus, 1379/1959［2nd edition, Damascus：Mudîrîyat Ihyâ' at-Turâth al-'Arabî, 1977, pp.97-194］；*Rihlat Ibn Fadlân* (*Ibn Faḍlân's Reisebericht*), ed. A. Zeki Validi Togan, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes—以下，Abh KM と略記—, 24・3, Leipzig：Deutsche Morgenländische Gesellschaft, 1939, pp.3-45 (pp.338-80)。これらほかに基づく邦訳，家島彦一訳注『イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1969 がある。

18) al-Qazwînî, *Âthâr al-bilâd wa-akhbâr al-'ibâd*, Beirut：Dâr Sâdir, 1380/1960—以下，この版を *Âthâr* と略記—, p.97。

19) Mashhad 写本 fol. 173a-182b［*Collection*, pp.347-62］；Yâqût, *Mu'jam al-buldân* (*Jacut's Geographisches Wörterbuch*), ed. Ferdinand Wüstenfeld, Leipzig, 1924—以下，この版を *Mu'jam* と略記—, vol. Ⅲ, pp.445-58；al-Qazwînî, *Âthâr*, pp. 45-6, 81, 94, 97, 104-5, 105, 106-7, 121-2, 124, 588, 606-7。また，Ibn an-Nadîm［pp.346-7］は，Abû Dulaf が直接語ったとする al-Hind の寺院の記事を載せる。

20) Mashhad 写本 fol. 182b-196b［*Collection*, pp.362-90］；*ar-Risâla ath-Thâniya li-Abî Dulaf Mis'ar b. al-Muhalhil al-Khazrajî* (*Abû-Dulaf Mis'ar ibn Muhalhil's Travels in Iran*), ed. V. Minorsky, Cairo：Wizârat at-Tarbiya wa-t-ta'lîm (Egyptian Ministry of Education), 1955, pp.1-31；*Vtoraia zapiska Abu Dulafa*, ed. P. G. Bulgakov & A. B. Khalidov, Moscow：Akademii nauk SSSR, 1960, pp.1-47。これらに基づく邦訳，イスラーム地理書・旅行記研究会訳注『アブー・ドゥラフ　イラン旅行記』京都大学文学部羽田記念館 1988 がある。

21) 家島彦一「ブズルク・ブン・シャフリヤール『インド奇談集』に関する新資料」『アジア・アフリカ言語文化研究』59, 2000, pp.18-19。

22) *Kitâb 'Ajâ'ib al-Hind* (*Livre des Merveilles de l'Inde*), ed. P. A. van der Lith, Leiden：E. J. Brill, 1883, pp.1-192；*'Ajâ'ib al-Hind*, ed. Yûsuf ash-Shârûnî, London：Riad El-Rayyes Books, 1990, pp.47-151。前者に基づく邦訳，藤本勝次・福原信義訳注『インドの不思議』関西大学出版・広報部 1978 がある。なお，2巻本と考えられるのは，第77話の最後に「以上で第1部が終わり，次に an-Niyân 島の情報が大2部に続く」とあるからだ［ed. P. A. van der Lith, p.125；ed. Yûsuf ash-Shârûnî, p.112］。

23) E. Littmann, Alf Layla wa-Layla, *The Encyclopaedia of Islam*, New edition—以下，*EI*.[2] と略記—, vol. Ⅰ, Leiden：E. J. Brill, London：Luzac & Co., 1960, p.363。

24) 家島彦一，前掲論文，pp.9-27。なお，この西暦10世紀に，al-'Umarî のこの書に拠ると，Abû 'Imrân Mûsâ b. Rabâh al-Awsî なる者がイフシード朝の実権を握っていた Kâfûr (357/968 年没) のために *as-Sahîh min akhbâr al-bihâr wa-'ajâ'ib-hâ wa-mâ yata'allaqu bi-dhâlika*『諸海とその奇事の情報およびそれに関連したことの真正集』を作成したらしい［家島彦一，前掲論文，pp.17-18］。

25) G. S. P. Freeman－Grenville["Some Thoughts on Buzurg ibn Shahriyar al-Ramhormuzi：*The Book of the Wonders of India*", *Paideuma*, 28, 1982, p.64］は，この作品が al-Mas'ûdî や後の者たちに知られていたと言う。また，G. R. Tibbetts［*A Study of the Arabic Texts Containing Material on South-East Asia*, Leiden & London：E. J. Brill, 1979, p.9］は，この作品が『諸奇事の要約』の一つのソースであると言う。更に彼［上掲書，p.12］は，al-Qazwînî の *K. 'Ajâ'ib al-makhlûqât* がこの作品を利用しているとも言う。

26) al-Maqrîzî の *al-Mawâ'iz wa-'l-i'tibâr fî dhikr al-khitat wa-'l-âthâr*［Bûlâq, 1270/1853 —以下，この書を

Mawâ'iz と略記—，vol. Ⅰ］は，この書を *K. Akhbâr an-Nûba wa-'l-Maqurra wa-'l-'Alwa wa-'l-Buja wa-'n-Nîl* と呼んだり［p.190］，*K. Akhbâr an-Nûba* と呼んだりする［p.65］。al-Manûfî の *K. al-Fayd al-madîd fî akhbâr an-Nîl as-sa'îd*［ed. Bargès—以下，この書を *Fayd* と略記—，*Journal Asiatique*, 3・3, 1837, p.119］は *K. Akhbâr an-Nûba* と呼ぶ。

27）al-Maqrzî, *Mawâ'iz*, vol. Ⅰ, pp.190-5；al-Manûfî, *Fayd*, *Journal Asiatique* 3・3, 1837, アラビア語テキスト pp.119-26, 152-4, 3・9,1840, pp.113-5, 127-8；Hamad Mohammad Kheir, A Contribution to a Textual Problem：Ibn Sulaym al-Aswânî's Kitâb Ahbâr al-Nûba wa l-Maqurra wal-Beğa wa l-Nîl, *Annales islamologiques*, Institut francais d'archéologie orientale du Caire, 21, 1985, アラビア語テキスト pp.49-72。

28）そのほか，H. M. Kheir［上掲論文，p.12］に拠れば，al-Qâdî Ma'rûf（西暦 16 世紀前半活躍）の *K. 'Ajâ'ib al-akhbâr 'an Misr al-amsâr* にも引用されている。また，Kheir［上掲論文，p.14］は Ibn Sulaym が al-Jâhiz や Ibn 'Abd al-Hakam などを利用・引用していると言う。

29）(al-Mas'ûdî, *Akhbâr az-zamân wa-man abâda-hu al-hidthân wa-'ajâ'ib al-buldân wa-'l-ghâmir bi-'l-mâ' wa-'l-'umrân*), ed. 'Abd Allâh as-Sâwî, Cairo：Matba'at al-Hanafî, 1357/1938［3rd ed. Beirut：Dâr al-Andalus, 1978, pp.23-278］（但し，｛ ｝内は欠けている）；*L'Abrégé des Merveilles*, traduit de l'arabe d' après les manuscripts de la Bibliothèque Nationale de Paris par le B. Carra de Vaux, Paris：Librairie Klincksieck, 1898［reprint by André Miquel, Paris：Sindbad, 1984, pp.37-341］。

30）前者の写本は Paris〈国立図書館〉写本 1471，後者は Paris〈国立図書館〉写本 1472 である。Carra de Vaux［*L' Abrégé des Merveilles*, pp.XXX-XXXIII, reprint, 1984, p.32］はこの作品の第 1 部は al-Mas'ûdî の作とすることも可能だが，第 2 部は彼のものではなさそうだと言っているが，『諸奇事の要約』の第 1 部と第 2 部とは本来，別作品であった可能性もある。そして，M. C. F. Seybold［*Orientalistische Litteratur-Zeitung* (Leipzig) 5, 1898, pp.146-50］や Gabriel Ferrand［*Relations de voyages et textes géographiques arabes, persans et turks, relatifs à l'Extrême-Orient du VIIIe au XVIIIe siècles*, vol. Ⅰ, Paris：Ernest Leroux, 1913, p.137］をはじめ，A. Miquel［前掲書，p.xxxv］などは，原著者を Ibrâhîm b. Wasîf Shâh と考え，この作品を 1000 年頃と見なしている。他方，上記（註 29）のように，'Abd Allâh as-Sâwî はこの作品を al-Mas'ûdî 著と考えているが，T. Khalidi［前掲書，p.154］は，この作品が al-Mas'ûdî のものか疑問だとする。また，D. M. Dunlop［*Arab civilization to AD 1500*, London：Longman, Beirut：Librairie du Liban, 1971，p.113］は，この作品は Ibrâhîm b. Wasîf Shâh が al-Mas'ûdî の『時代の情報』を利用して著したものと考えているようだ。なお，F. Wüstenfeld［*Die Geschichtschreiber der Araber und ihre Werke*, Göttingen, 1822, no. 373a］以来，Ibn Wasîf Shâh は西暦 12～13 世紀にエジプトに生きた人物とされることが多い。因みに，Sayyid Kasrawî Hasan［Ibrâhîm ibn Wasîf Shâh, *Mukhtasar 'ajâ'ib ad-dunyâ*, ed. Sayyid Kasrawî Hasan, Beirut：Dâr al-Kutub al-'Ilmîya, 2001］は，Ibn Wasîf Shâh が al-Mas'ûdî の『黄金の牧場』を利用した *Mukhtasar 'ajâ'ib ad-dunyâ*『この世の諸奇事の要約』を著したと考える。

31）Ursula Sezgin, Al-Mas'ûdî, Ibrâhîm b. Wasîfšâh und das Kitâb al-'Ağâ' ib. Aigyptiaka in arabischen Texten des 10. Jahrhunderts n. Chr., *Zeitschrift für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften*, 8, 1993, pp.1-70；Ursula Sezgin, Pharaonische Wunderwerke bei Ibn Wasîf as-Sâbi' und al-Mas'ûdî. Einige Reminiszenzen an Ägyptens vergangene Grösse und an Meisterwerke der alexandrinischen Gelehrten in arabischen Texten des 10. Jahrhunderts n. Chr., *Zeitschrift für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften*, 9, 1994, pp.229-91。この Ibn Wasîf as-Sâbi' なる人物は，U. Sezgin［上掲書 1993, p.6；上掲書 1994, pp.229-30］に従えば，Harrân 出身のサービー教徒で，西暦 10 世紀に眼科医として Baghdâd で活躍し，自然哲学にも通じていた人物らしい。

32）al-Bakrî, *Kitâb al-Masâlik wa-'l-mamâlik*, ed. A. P. van Leeuwen & A. Ferré, Tunis：ad-Dâr al-'Arabîya li-'l-Kitâb, 1992—以下，この版を al-Bakrî *Masâlik* と略記—, pp.210-24。

33）拙稿「海のスィンドバード物語とアラビア語地理書との関係について」『中東イスラム文化の諸相と言語研究』大阪外国語大学 1999, pp. 269-70（pp.255-74）。

34）Tibbetts［前掲書，p.12］は al-Qazwînî の *'Ajâ'ib al-makhlûqât* がこの作品を利用していると言う。なお，al-Bakrî の *Masâlik* は，上記（註 32）の著者名無記の『国々の諸奇事』からとする諸海の奇事

に関する引用或いは利用のほかに，al-Wasîfî が言った或いは述べたとして，Nûh に関する記述［pp.75，78，79］，そして Misr の王たちに関する記述［pp.541，547，548，549，551］も載せており，Leeuwen & Ferré［al-Bakrî *Masâlik*, introduction pp.19-20］は，この al-Wasîfî を Ibrâhîm Wasîf Shâh であろうと考える。その場合，Ibrâhîm Wasîf Shâh は al-Bakrî より前か同時代，すなわち 11 世紀以前の人物ということになる。第 2 部のエジプトの伝説的歴史の箇所は，al-Bakrî の *Masâlik* のほかにも，12 世紀の著者不詳の『諸都市の奇事の熟考』［al-Wasîfî として］，an-Nuwayrî の前掲書［Ibrâhîm b. Wasîf Shâh の *Kitâb al-'Ajâ'ib al-kabîr* の要約として］，al-Maqrîzî の前掲書［Ibrâhîm b. Wasîf Shâh の *Akhbâr Misr wa-'ajâ'ib-hâ* として］，Ibn Iyâs の『国々の奇事に関する花々の香り』［Ibn Wasîf Shâh として］などに引用・利用されている。

35) ヘブライ語で書かれた可能性もある。

36) 以上，al-Bakrî, *Masâlik,* pp.330-40, 913-5；al-Qazwînî, *Âthâr,* pp.556, 575, 590, 601-2, 607, 608；al-'Udhrî, *Nizâm al-marjân fî 'l-masâlik wa-'l-mamâlik*（*Tarsî' al-akhbâr wa-tanwî' al-âthâr wa-'l-bustân fî gharâ'ib al-buldân wa-'l-masâlik ilâ jamî' al-mamâlik*), partial ed. 'Abd al-'Azîz al-Ahwânî, *Nusûs 'an al-Andalus*, Madrid：Ma'had ad-Dirâsât al-Islâmîya, 1965, p.7。

37) al-Bakrî の *Masâlik*［pp.330-35］は，極西にある Nâqûn（北ドイツの Schwerin-Mecklemburg 地方に住む Obodr 人たちの首長 Naccon）の国，Frâgha（プラハ）と Bawyima（ボヘミア）と Karâkwa（クラコウ）との王 Buwayaslâw（Boleslas 1 世，在位 929-67）の国，北の王 Mashquh（ポーランド王 Mieszko 1 世，在位 960-92）の国，al-Bulqârûn（ブルガリア人たち）の王（おそらくは Tsar Peter, 在位 927-69）の国について記す。

38) *Tanbîh*, p.75；Ibn an-Nadîm, p.147。その他，al-Idrîsî の前掲書を始め，Abû Hâmid al-Gharnâtî（565/1170 年没）の *K. Tuhfat al-albâb wa-nukhbat al-'ajâ'ib*『理性の贈物と驚異の精髄』，al-'Umarî の前掲書などが載せる，Lishbûna（リスボン）から Bahr az-zulmât（暗黒の海，すなわち大西洋）に船出して，「羊の島」（マデイラ島か）や人の住む島（カナリア諸島の一つか）に至り，最終的には，Asfî（現モロッコの Safi）にたどり着いたという，al-Mugharrirûn（冒険者たち）或いは al-Maghrûrûn（向こう見ずな者たち）とあざなされる 8 名の若者の探検旅行の記録も，Ignatiy Yulianovich Krachkovskiy［*Arabskaya geograficheskaya literatura*, Izbrannye sochineniya, IV, Moscow & Leningrad：Ak. nauk SSSR, 1957, p.135］に従えば，この 4/10 世紀のものらしい。尤も，Dunlop［前掲書，pp.162-3］は 3 / 9 世紀の可能性もあるとする。更には，Sayyid Maqbul Ahmad［*A History of Arab-Islamic Geography*（*9th -16th Century A.D.*), Amman：Al al-Bayt University, 1416/1995, p.57］は，400/1009 年頃にインドの船でアフリカ東岸に沿って航海した Khawâshîr b. Yûsuf al-Arkî が著した『航行案内』Rahmânî を挙げている。

39) M. J. de Goeje, Die Istakhrî − Balkhî Frage, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 25, 1871, p.57；Krachkovskiy, 前掲書，pp.195-6。また，Ibn al-Wardî［*Kharîdat al-'ajâ'ib wa-farîdat al-gharâ'ib*, ed. Mahmûd Fâkhûrî, Aleppo：Dâr ash-Sharq al-'Arabî, 1411/1991, p.10］は *Taqwîm al-bilâd*『国の調査表』と呼んでいる。なお，V. Minorsky［*Sharaf al-Zamân Ṭâhir Marvazî on China, the Turks and India*, London：the Royal Asiatic Society, 1942, p.90, no.1］は Hamd Allâh Mustaufî（750/1349 年没）の *Nuzhat al-qulûb*『心の歓喜』というペルシア語で書かれた百科全書が利用する *Suwar al-aqâlîm* と，al-Bîrûnî（440/1048 年没）の *K. al-Jamâhir fî ma'rifat al-jawâhir*『宝石の知識に関する集成』［ed. F. Krenkow, Hyderabad：Dâ'irat al-Ma'ârif al-'Uthmânîya, 1936, pp.204, 216, 246］が言及する *Ashkâl al-aqâlîm* とを，「al-Balkhî の？」としている。その他，Ibn al-'Adîm の前掲書［M. Canard, Quelques observations sur l'introduction géographique de la Bughyat at'-T'alab de Kamâl Ad-Dîn ibn Al-'Adîm d'Alep, *Annales de l'institut d'études orientales*（Alger）15, 1957, p.43］や Ibn ash-Shihna の前掲書［*Ta'rîkh Halab*, ed. Keiko Ohta, Tokyo：Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1990, p.163］はおそらくこの作品を *Kitâb Sûrat al-ard* と呼んでいる。

40) *Ahsan,* p.4。

41) S. Maqbul Ahmad, Djughrâfiyâ, *EI.*², vol. II，Leiden：E. J. Brill, London：Luzac&Co, 1965, pp.581-2；S. M. Ziauddin Alavi, *Arab Geography in the Ninth and Tenth Centuries*, Aligarh：Aligarh Muslim

University, 1965, pp.37-9。Krachkovskiy［前掲書，pp.194-218］は，古典学派と呼ぶ。

42）Ibn an-Nadîm［p.138］は，al-Balkhî の著作の一つに，「Abû Ja'far al-Khâzin による天界と世界の書の諸図の解説」なる書を挙げている。それで，A. Sprenger［*Die Post-und Reiserouten des Orients*, Abh KM, 3・3, 1864, pp.xiii-xiv］や C. A. Nallino［*Le Tabelle geographiche d'al-Battani*, tradotte ed annotate dal C. A. Nallino. *Cosmos*, 12, Torino, 1896, p.46, note 2］は，al-Balkhî が Abû Ja'far al-Khâzin の地図に基づいたのではないかと推測し，V. V. Barthold（1930）［V. Minorsky, *Ḥudûd al-'Âlam 'The Regions of the World'*, London：Luzac & Co., 1937, p.xv, 18, note 5］も，al-Balkhî の地理書が Abû Ja'far al-Khâzin の諸地図の説明書に過ぎないかも知れないと言ったが，Krachkovskiy［前掲書，p.207］は Abû Ja'far al-Khâzin（Muhammad b. al-Hasan al-Khurâsânî）は 350/961 年以後に没したと考えられ，al-Balkhî より遥に年下であり，Sprenger 以下の説は成り立たないと言う。いずれにせよ，天文学者 al-Khâzin も地図（経緯度を用いた地図か否かは不明）を作製したらしい。Ibn an-Nadîm［p.138］は更に，al-Balkhî の著作の一つとして，*K. Fadâ'il Makka 'alâ sâ'ir al-biqâ'*『メッカが他地点に対して持つ長所』なる書も挙げている。

43）執筆を前世紀の 266/880 年とする説もある［Ahmad Sûsa, *ash-Sharîf al-Idrîsî fî 'l-jughrâfiyâ al-'arabîya*, Part Ⅰ，Baghdad：Niqâbat al-Muhandisîn fî 'l-Jumhûrîyat al-'Irâqîya, 1974, pp.98, 135；Z. Alavi, 前掲書，pp.27-8］。

44）*al-Kharâj wa-sinâ'at al-kitâba*, ed. Muhammad Husayn az-Zabîdî, Baghdad：Dâr ar-Rashîd，1981, pp.77-200；*Nubadh min Kitâb al-Kharâj wa-sinâ'at al-kitâba*（*Excerpta e Kitâb al-Kharâdj*）, ed. M. J. de Goeje, BGA. Ⅵ，Leiden：E. J. Brill, 1889, pp.184-266。

45）この地理書の執筆を，al-Balkhî の生存中の 320/932 年頃ではないかとする説［Dunlop，前掲書，p.164］や，318-21/930-3年とする説［A. Sûsa，前掲書，p.159］もある。この地理書は *al-Masâlik wa-'l-mamâlik*［ed. Muhammad Jâbir 'Abd al-'Âl al-Hînî, Cairo：Dâr al-Qalam, 1381/1961—以下，この書を Hînî 版と略記—］，或いは *Kitâb Masâlik al-mamâlik*［（*Viae regnorum descriptio ditionis moslemicae*），ed. M. J. de Goeje, BGA. Ⅰ，Leiden：E. J. Brill, 1870］のほか，*Kitâb al-Aqâlîm*［（*Liber climatum*），ed. J. H. Moeller, Gotha：Libraria Beckeriana, 1839］とか，*Kitâb al-Ashkâl*［BGA，Ⅰ，p.348］とも呼ばれている。また，al-Istakhrî はこの書とは別に，Fâris に関する risâla も著したようだ［Hînî 版，p.67］。

46）Hînî 版，pp.15-192。cf. BGA. Ⅰ，pp.2-348。本来の地図は彩色されていたらしい［A. Sûsa，前掲書，p.160］。

47）J. H. Kramers, La question Balḫî－Iṣṭaḫrî－Ibn Ḥawḳal et l'Atlas de l'Islam, *Acta Orientalia,* 10, 1932, pp.9-30。

48）J. H. Kramers, L'influence de la tradition iranienne dans la géographie arabe, *Analecta Orientalia* Ⅰ，Leiden：E. J. Brill, 1954, pp.153-6。

49）拙稿「Iqlîm 考—Yâqût を基に—」，pp.78-81。

50）ペルシア語の翻訳としては，5/11 世紀か 6 /12 世紀と考えられる作品［*Masâlik va Mamâlik, ta'lif-i Abû Ishâq Ibrâhîm Istakhrî*, ed. Îraj Afshâr, Tehran：Bungâh-i Tarjumah va Nashr-i Kitâb, 1347/1969］—726/1325 年筆写の Tehran, Mûzah-i Îrân-i Bâstân, MS. 3515—や，W. Ouseley が英訳した *Suwar al-buldân* というペルシア語テキスト［*The Oriental Geography of Ebn Haukal*, London, 1800］— 670/1272 年筆写の Oxford, Bodleian Library, MS. Ouseley 373—ほかがある。地図もペルシア語世界で評判になる。

51）また，Yâqût の *Mu'jam*［vol. Ⅰ，p.375］は彼を "at-tâjir al-Mawsilî（モースルの商人）" としている。その他，Baghdâd 出身説［A. Sûsa，前掲書，p.170］もある。

52）Reinhart Dozy, *Histoire des Musulmans d'Espagne*, vol. Ⅲ，Leiden：E. J. Brill, 1861, pp.17, 21, 181-2。

53）Ibn Hawqal は as-Sind の章の最後で，al-Istakhrî との出会いを記すが，as-Sind で会ったとは言っていない［*Kitâb Sûrat al-ard*（*Opus geographicum "Liber imaginis terrae"*），ed. J. H. Kramers, BGA. Ⅱ，Leiden：E. J. Brill, 1938—以下，Sûrat と略記—，p.329］。Krachkovskiy［前掲書，p.198］は両者の出会いを 340/951-2年と考える。そして J. H. Kramers & G. Wiet［*Ibn Hauqal, Configuration de la Terre*

(*Kitab Surat al-Ard*), tr. J. H. Kramers & G. Wiet, Beirut：Commission Internationale pour la Traduction des Chefs-d'OEuvre, Paris：G. -P. Maisonneuve & Larose, 1964 —以下，*Configuration* と略記— , vol. Ⅰ, p.x, vol. Ⅱ, p.322]はas-Sindで会ったと考え，M. J. 'A. al-Hînî[Hînî版, p.9]は325AHにBaghdâdで会ったと考える。

54) Krachkovskiy，前掲書，p.199；Kramers & Wiet, *Configuration*, vol. Ⅰ, p.xiii。初稿に拠ったM. J. de Goeje版は*K. al-Masâlik wa-'l-mamâlik*という書名を持つ［BGA. Ⅱ, Leiden：E. J. Brill, 1873]。

55) *Sûrat*, pp.1-528。

56) 534-80/1139-84年頃[Kramers, *Sûrat*, p.v]に，その要約がアラビア語で著されている—849/1445年？筆写のMS. Arabe 2214, Paris, Bibliothèque Nationale—。

57) Yâqût, *Mu'jam*, vol. Ⅰ, pp.276, 335など10箇所；vol. Ⅱ, pp.90, 111など9箇所；vol. Ⅲ, pp.19, 126, 246など16箇所；vol. Ⅳ, pp.54, 72, 75など22箇所。Abû 'l-Fidâ', *Taqwîm al-buldân*, ed. M. Reinaud & M. G. de Slane, Paris：L'imprimerie royale, 1840, pp.22, 48, 53, 82, 87, 89, 93, 95, 97, 99など223箇所。Al-Qalqashandî, *Subh al-a'shâ fî sinâ'at al-inshâ'*, Cairo：al-Mu'assasa al-Misrîya al-'Âmma, 1963, vol. Ⅲ, p.394, vol. Ⅳ, pp.82, 99, 102, 104, 111, 113, 114, 122, 123-4など69箇所。特に，ビザンツ帝国とアッバース朝の領土で，このファーティマ朝カリフが征服を狙う地域に関する情報が詳しいのではなかろうか。

58) Muhammad b. al-Hasan al-Kilâ'î（5 /11世紀？）なる人物がMuhallabîの書の一部を引用している[Salâh ad-Dîn al-Munajjid, Qit'a min kitâb mafqûd, al-masâlik wa-'l-mamâlik li-'l-Muhallabî, *Majallat ma'had al-makhtûtât al-'arabîya*, 4, Cairo, 1958, pp.49-65]。

59) S. Maqbul Ahmad［Kharîta, *EI.*², vol. Ⅳ, Leiden：E. J. Brill, 1978, p.1079］に従えば，"気候帯" iqlîmを用いた，いわゆるPtolemaios系統の地図と考えられる。

60) 拙稿「ムカッダスィーの『諸州の知識に関する最良の区分の書』について」『大阪外国語大学学報』64, 1984, p.106。なお，Aya Sofya 2971写本では単に*Kitâb al-Aqâlîm*『諸州の書』とも呼ばれている。

61) *Ahsan*［*K. Ahsan at-taqâsîm fî ma'rifat al-aqâlîm* (*Descriptio imperii moslemici*), ed. M. J. de Goeje, BGA. Ⅲ, Leiden：E. J. Brill, 1877], pp.1-498。

62) 著者の言及に基づく［*Ahsan*, p.9]。上記のde Goeje版には，地図が付いていないが，BerlinのSprenger 5（Ahlwardt6034）写本には単色の各州の地図が残っている。

63) 西暦10世紀における「諸道と諸国の学」に属する作品の中では，このal-Muqaddasî（al-Maqdisî）の書が近年，最もよく研究されている。A.Sprenger, *Die Post- und Reiserouten des Orients*, Leipzig, 1864に始まる，al-Muqaddasîの研究は，Henri Lammens, al-Maqdisî wa-jughrâfîyat Sûrîya fi 'l-qarn al-'âshir li 'l-mîlâd, *al-Mashriq*, 10, 1907, pp.683-95などを経て，A. Miquel, Les portes d'Alep chez Muqaddasî, *Arabica*, 7, 1960, pp.60-71；T.Lewicki, A propos d'un traité géographique d'Al-Muqaddasî, *Cahiers de civilisation médiévale,10e-12e siècles*, 12, Poitiers：Université de Poitiers, 1969, pp.35-42；Sabâh Mahmûd Muhammad, al-Wasf al-manâkhî 'inda al-Maqdisî, *Dirâsât fî 't-turâth al-jughrâfî al-'arabî*, Baghdad：Wizârat ath-Thaqâfa wa-'l-I'lâm, Dâr ar-Rashîd li 'n-Nashr, 1981, pp.41-51；A. Miquel, L'organisation de l'espace dans la présentation de la Palestine par le géographe Al-Muqaddasî, Ⅳ e/ X e siécle, *Revue d'Études Palestiniennes*, 2, 1982, pp.84-96；Muhammad Mahmûd Muhammadayn, Mafhûm al-iqlîm wa-uslûb dirâsat-hu 'inda al-Maqdisî, *Buhûth al-Mu'tamar al-Jughrâfî al-Islâmî al-Awwal* (*Proceedings of the First Islamic Geographical Conference*), Riyadh：Jâmi'at al-Imâm Muhammad bn Sa'ûd al-Islâmîya, 1404/1984, vol. Ⅲ, pp.339-56；Akhtar Husain Siddiqi, Al-Muqaddasî's Treatment of Regional Geography, *International Journal of Islamic and Arabic Studies*, 4・2, 1987, pp.1-13；D. Sturm, The Arab geographer al-Muqaddasî:witness of popular custom in the tenth century, *The Arabist* (Budapest), 9-10, 1994, pp.37-47；D. A. Agius, Historical-linguistic reliability of Muqaddasî's information types of ships, *International Medieval Research*, 1, Turnhout：Brepois, 1997, pp.303-29などがある。

(2002. 10. 11受理)